

## 御供船の盛衰と「橋」

### ―広島と管絃祭との関わりについて―

松井 輝昭（県立広島大学名誉教授）

はじめに

厳島神社では今日も旧暦六月十七日の夜に、「管絃祭」（元は、「十七夜船管絃」と呼ばれる神事が執り行われている<sup>(1)</sup>。この祭りは戦国大名毛利氏の庇護のもとに発展し、江戸時代前期には同神社最大の祭りになったと考えられる<sup>(2)</sup>。そして、このうち享保・元文年間（二七二―四二）以降になると、広島城下の町々から美しく装った御供船が出るようになった。御供船の数は最も多いときには、数十艘から一〇〇艘近くにもなったという<sup>(3)</sup>。なお、これらの美しく飾った御供船が厳島神社へ向かうとき、取り分け厳島神社から戻ってきたときには、広島城下の京橋川・元安川・本川などの川に、何艘もの囃し船や遊び船などが出て、音曲が奏でられ手踊りが行われるだけでなく、陸上でも数多くの篝火がたかれ花火が上げられるなどしたため、大きな祝祭空間が生まれることになった。その結果、広島城下の内外からこの喧噪と光に満ちた世界に身を置き楽しむため、多くの人々が川の兩岸や橋の上につめかけることになった。本稿では、以上のような厳島神社の管絃祭と広島城下（のちの広島市域）との関わりについて<sup>(4)</sup>、江戸時代から大正時代にまで視野を広げ、その時代的推移に関する大まかな検討を行う。

このように多くの人々が管絃祭のおり広島に集まることについて、『芸備日日新聞』明治二一（一八八八）年七月二五日の次の記事が一面の真実を伝えていると考えられる<sup>(5)</sup>。

【史料一】

昨日本日は日本三景の一たる宮島神社の管絃祭なれば、当市中も何と

なく賑やかなり、殊に近在より出かけたるは、例年の通り夥しき人数にて、之が為め旅人宿車屋淀川すし二八蕎麦等ハ、余程の金儲けなるべし、

このような広島城下から出た御供船について、江戸時代中ごろ以降の地誌やその後の市町村史などでも簡単に触れられている。ただ、江戸時代の御供船について本格的な検討を加えたのは、西村晃氏の政治・経済史的な視点の研究をもって嚆矢とする<sup>(6)</sup>。本稿では西村氏の先駆的な研究に学びつつ、視野を大正時代にまで広げることで、管絃祭と広島との関わりを具体的に検討する。むろん、御供船は明治時代に入ると消滅する、広島に「橋」が増えたからだなどの、安直な結論が独り歩きしている現実の克服を前提とする<sup>(7)</sup>。

そこで、以下、次のような四つの手順で検討を加える。まず、管絃祭は広島城下の人々にとって（のちの広島市民にとって）、どのような祭りであったのかその意味合いを探る。次いで、御供船の江戸時代から明治時代にかけての盛衰、御供船と「橋」との関係について検証する。そのうえで、山陽鉄道の開通と御供船の衰退の関わりを明らかにする。最後に、御供船の終焉と広島との賑わい再生の方策に触れ、広島が大正時代に入ると「水の都」、「水郷」と呼ばれた理由についても付言する。

最初は、管絃祭が広島城下の人々にとって、どのような祭りであったといえるのか、その意味合いについて考えることにする。

#### 一 広島の人々にとっての管絃祭と御供船

厳島神社では遅くとも戦国時代に入るころには、旧暦の六月十七日に管絃祭が営まれるようになっていたようである<sup>(8)</sup>。この祭りはやがて広島の人々にも、有形無形の様々な影響を与えることになったといえる。例えば、広島城下の武士は管絃祭の日は休みで、その夕刻に袴を付けて正装し、厳島神社に向かつて拝礼するのが習わしとなっていた<sup>(9)</sup>。また、広島町の町場で暮らす人々も明治時代後半においても、管絃祭の三日間は仕事を休み厳島神社に参

詣するか、当地の橋本町明神浜の厳島神社や材木町誓願寺の厳島神社に参つたという(『芸』明治三十九年八月七日他)<sup>(10)</sup>。ただ、広島やその近郊に住む人々にとつて、管絃祭が新たな意味合いの祭りになったのは、享保・元文年間以降のことと考えて間違いないであろう。つまり、美しく飾つた御供船が管絃祭の御座船に随行するため、広島から厳島神社に向けて船出するようになつてからである<sup>(11)</sup>。このころになると広島城下でも町の自立性が強まり、それぞれの町の御供船も華美を競うようになった。また、御供船が広島川の川を出入りするとき、奏楽や手踊りで囃しまわる船も何艘も出た。これらの囃し船などのなかには、御供船を出さない町のものも含まれていた。なお、このような川の中の賑わいを増幅するため、さきに述べたように陸上でも数多くの篝火がたかれ、数多くの提灯が掲げられただけでなく、花火までも上げられたのである。そして、このような祝祭空間に身を置きともに楽しむため、多くの見物人が川の兩岸や「橋」の上に駆けつけることになった。したがって、広島各町で御供船を美しく豪華に飾り立て、御供船を中心とする大きな賑わいを創り出したのは、厳島神社に自分たちの町のさらなる発展を祈るとともに、その富や活気を各方面に誇る意味合いがあつたものと考えてよいであろう。

なお、熊見曲水は明治四〇(一九〇七)年に、管絃祭の御供船に関して次のような興味深い逸話を書き残している<sup>(12)</sup>。

【史料2】

私の祖母が育つて居た所に拠れば、今の安佐郡祇園村の安神社即ち昔の祇園社には、広島各町村の御供船の絵が絵馬額にしてあつたが、この竹屋町の如き下鄙た町ですら立派な御供船を出して居たと申して居ました

では、広島各町・村から厳島神社に向いた御供船の絵馬を、なぜ祇園村(現、安佐南区祇園)の安神社(祇園社)に奉納する必要があつたのだろうか。この問題を解くための一つの手掛かりと考えられるのは、管絃祭に「祇園祭」に類した性格が認められることである。江戸時代中ごろでも管絃祭の日には、多くの人々が浜辺や川辺で「管絃潮」をいただく習わしがあつたと

いう(「厳島道芝記」巻七)。明治時代中ごろに至つても依然として、管絃祭の日に広島各川で水浴し「無病息災を祈る」慣習が続いていた(『芸』明治三〇年七月十六日)<sup>(13)</sup>。ゆえに、広島の人々は遅くとも江戸時代中ごろには、管絃祭の日に大きく膨れあがつた潮(管絃潮)に疫病除災の役割があると考へていたことが分かる。「管絃潮」と管絃祭を切り離すことができないから、この祭りにも疫病除災の役割が期待されていたと考へてよい。ところで、御供船が管絃祭の前日に広島各河口から漕ぎ出すとき、「祇園囃子」を奏でて送り出すことにしていたのも(『芸州厳島図会』巻之五)、この祭りに「祇園祭」と同じ疫病除災神の役割を認めていたためと推測できる。したがって、御供船を出した広島各町・村から祇園の安神社に御供船の絵馬を奉納したのも、次のような考へによるものと思われる。つまり、厳島神社や大元神社などの祭神の本地仏は、十一面観音や薬師如来などであり祇園神社の本地仏とほぼ同じといえる<sup>(14)</sup>。また、管絃祭は海上から雅楽を奏で伽陀を引くことにより、旧暦六月十七夜に各神社の神霊を慰め奉ることになる。広島各町・村から厳島神社に向かつた御供船も、その船体を美しく飾り立て管絃船に随行することで、それぞれの神霊を慰め祭りを盛り上げる役割を果たすことになる。しかも、祇園村の安神社は「安芸之國祇園社」と称される存在であつたから、広島各町・村の人々は、御供船の絵馬を同神社に奉納することによって、祇園神社の祭神に自分たちの働きを改めて確認してもらおうとした。そして、自分たちの町や村から疫病などが無くなることを強く望んだわけである。

だが、広島各町・村から御供船を送り出すことにより、厳島神社などの神々への奉仕がすべて終わつたわけではない。広島に勧請された材木町誓願寺や橋本町明神浜の厳島神社においても、管絃祭と同じ日に祭りが行われ多くの入出があつたことが知られている。これも広島各町の疫病除災を祈るところの、いま一つの管絃祭といふことができる。なお、広島各川の川に御供船が出入りするとき、川の中で繰り広げられる御供船と囃し船などが創る喧嘩も、祭神の存在が明らかではなく神事としては曖昧さが残るけれども、もう一つの管絃祭といえるのではないだろうか。

次は、管絃祭の前後の日に広島各川の中や、その兩岸と「橋」の上に創り

出される、無秩序な祝祭空間について改めて考えることにする。

## 二 御供船が創る祝祭空間と「橋」

厳島神社の管絃祭前日の旧暦の六月十六日、翌日の十八日に御供船が広島  
の河口から出入りするときに、美しく豪華に飾ったその船体や、そのまわりで  
楽を奏し手踊りなどをする船を見物するため、多くの人々が川の両岸や「橋」  
の上に集まった。さきに掲げた図1のような光景である。夜になっても数多  
くの提灯や篝火に照らされ、川の中とそれに呼応する陸上の見物人による喧  
噪が続くことになった。

こうして御供船は川という身近にある異空間の中に、ある種の劇場空間を  
創り上げることによって、多くの人々を魅了することになったことは間違  
ない。

では、このような御供船を中心とする川の中の劇場空間を、さきに述べた  
ようにいま一つの管絃祭と見なしえるのだろうか。単に夏の夜の川の中に生  
まれた異常なる喧噪、この喧噪に加わった人々の物見遊山にすぎないともい  
える。しかし、御供船が厳島から広島に川に戻ったときの、次のような儀式  
について考えることも無駄ではなからう<sup>(15)</sup>。

### 【史料3】

御供船は十七日の夜、管絃祭の了るを待ち、広島へ向け厳島を解纜す、  
十八日の朝川口に入れるとき、町々よりは江波沖へ、迎ひの船に酒食  
を載せ、是にも絲竹鉦鼓を囃子たて、或はまた手踊なして本船の先導  
となり、本川元安京橋の諸川々へと帰れるは、潮の満し正午の前なる  
べし、此朝も亦両岸や橋の上なる見物人、または川中の遊船や、厳島  
帰船の賑ひは、十六日に於ける黄昏と一に異なることはなかりけり

つまり、各町の御供船を江波沖で「酒食を載せた船」が出迎え、一艘ずつ  
奏楽や手踊りで囃し立て出発地の川に誘うのが習わしであったという(「村  
上家乗」寛政七(一七九五)年六月十八日)<sup>(16)</sup>。

「迎え船」を中心とした広島に河口のこの儀式に、管絃船に随行し神霊を

慰め奉った御供船の労をねぎらう意味合いがあったことは否定できない。し  
かし、新たに神霊を宿して川に戻ってきた御供船を見物人とともに囃し立  
てること、それぞれの町のさらなる安寧と繁栄を願う意味合いがあったと考  
えることもできる。

ゆえに、以上の理解が首肯されるのであれば、新たに神霊を宿し川に戻  
った御供船を中心とする喧噪空間にも、広島に二か所の厳島神社の祭りと同じ  
く、いま一つの管絃祭の性格が認められるといつてよいであろう。なお、西  
村氏が紹介した「村上家乗」の御供船の記事を参照すると、広島藩主や上層  
武士が御供船を見物に出たのは、多くは旧暦六月十八日の厳島からの戻り船  
であったことが分かる。これは御供船が厳島から一斉に戻って来るのが正午  
ごろであり、その美しい様を見物するのが好都合であったことは否定できな  
い。しかし、この御供船を中心として創り出される新たな喧噪、つまり新た  
な祝祭空間に格別な意味を見出していたと考えることもできる。

しかし、御供船が旧暦六月十六日の夜半に河口を出るときにも、多くの人々  
が川の両岸や橋の上に駆けつけている、との批判も当然予想される。ただ、  
これは厳島からの戻り船を中心とする、昼から夜にかけての非常な賑わいに  
比べれば、その前夜祭的な意味合いしか持たないように思われる。

いづれにしろ、広島に川の中で練り広げられる、御供船を中心とする劇場  
空間を眺めるに際して、川の両岸やその川をまたぐ「橋」は絶好の観客席に  
なりえた。取り分け、「橋」は誰でもが自由に往来できる空間であり、町の  
壁を取り払って祝祭空間を大きく広げる役割を果たしたものと考えられる<sup>(17)</sup>。  
江戸時代末期には多くの見物人の重みに耐えかね、京橋の橋梁の柱の一本が  
折れて崩れ落ちることもあった<sup>(18)</sup>。ただ、江戸時代の広島では防衛上の配慮  
から「橋」の数が限られていたため、多くの人々にとってははめつたに渡らな  
い異空間であった可能性が大きい<sup>(19)</sup>。しかし、広島にも明治時代になると多  
くの「橋」が作られるようになったためか、御供船を浮かべる川の「橋」に  
架けられた橋梁について警察署から注意が出されている。つまり、本川橋は  
五七六〇人、元安橋は四一七〇人、京橋は三九六人以上が渡ると限界であ  
るといのである(『中』明治三二年七月二七日)。おそらく、御供船を中心

とする劇場空間がこれらの「橋」の近傍に生まれ、多くの見物人が群集することが予想されたからであろう。

なお、明治時代に御供船が消滅したのは「橋」が増えたから、という通説に対してときに安直な結論が独り歩きしていると批判的に述べた。以上のような理解がこの失礼とも思える表現の背景にある。この私説が誤りでないことを補強するため、長文ではあるが「堺町の御供船」に触れた『芸備日日新聞』（明治二十七年七月二〇日）の記事を次に掲げる。

#### 【史料4】

本市堺町より出せる厳島大祭の御供船は、三四日前より本川橋と新橋との中間に繫留し、頻りに飾付等の準備を為し居りしかば、往来の人々は絶えず山の如く両橋の欄干にもたれて見物する故危険の恐れありとて、広島水上警察署の調査は惣代に向つて、御供船を西本川の岸辺に繫留すれば、見物人も随て陸上より見物するならん、左すれば危険の恐れなきより早速然かすべしと、懇々注意を与へたるは一昨日の午前十一時過ぎの事なりしが、恰も引潮の時刻にて船体の動揺頗る困難を感ずるより、満潮を待て繫留変へを為さんことを申立てしに、調査は是非取除けずんば不都合なりとの事より、総代も一時は怒り直様広島商業会議所に出頭し、右の趣を談じ、満潮まで取除ることを猶予せられんことを、其筋へ申立てられんことを申出でたるより、岡野副会頭は直様広島水上警察署に出頭し事情を述べて満潮の上取除ることを許されたりきといふ、

この史料4によるならば、本川橋と新橋との中間に「堺町の御供船」を繫留しその飾り付けを始めたため、多くの見物人が「橋」の上に駆けつけ問題となったこと、また満潮のときには御供船の移動が可能であったことが分かる。ゆえに、明治時代になり広島の川に「橋」が増えたため、御供船が消滅したという理解は誤りということになる。

次は、山陽鉄道が明治三〇年九月二五日に徳山まで延伸し、これにともない大野村宮島停車場前棧橋から宮島港棧橋までの船便が確立したのち（『芸』明治三〇年九月二一日）、広島河の河口から出ていた御供船がどうなったのか

を検討することが必要になる。

### 三 山陽鉄道の開通・延伸と御供船

厳島神社は慶応四（一八六八）年六月初めごろには、明治維新政府の命令に従つて僧侶のいない「十七夜船管絃」（「管絃祭」）の様式を定めている<sup>(20)</sup>。しかし、こののち明治四（一八七一）年の全国的な神社改革により、舞楽に携わる楽家・伶人の多くが離散することになったわけである。また、厳島に留まったわずかの神官たちも、生活に苦しみ舞楽の伝統が消滅する恐れさえあった（『芸』明治三一年七月二九日）。しかし、管絃祭は明治十四（一八八一）年に祭神の海上渡御の方式に改まると、翌年からこの新しい方式の祭りが始まることになったのである。管絃祭は明治四年以降の神祇制度の転換により、しばらく中止せざるをえなかったのではないか<sup>(21)</sup>。広島から明治四年の管絃祭に三艘の御供船が出たことが確認できるが、これ以降に御供船が継続して派遣された可能性は小さいと考えられる。明治二〇年の管絃祭のおりには、広島京橋町からわずか一艘の御供船が派遣されている（『芸』明治二〇年八月二日）。こののち明治三三ごろになると京橋町だけでなく、中島本町・塚本町など複数の町でも、御供船の艤装・派遣を計画するようになった（『芸』明治三三年七月二三日）が、これらの町の御供船が厳島まで出向いたか、あるいは出向くことがなかったかははっきりしない。なぜなら、広島商業振盛会が明治二四年の管絃祭のおり、広島賑わいを高めるため音頭を取つて、元安川・本川・京橋川・天満川などに御供船を浮かべ、囃し船を仕立てるとともに、花火まで打ち上げることにしてしたが、最初は厳島に御供船を一艘も派遣するつもりはなかったという。このおりに八艘もの御供船が艤装され川に浮かんでいたため、兩岸の堤防や「橋」の上には多くの人々が見物に出てきた。驚くほどの人出があったため、本川橋・元安橋・京橋などは、一時通行することもできなくなったと伝えられる（『芸』明治二四年七月九日、同二四日）。そして、翌明治二五年にも広島河の川に九艘の御供船が艤装され、そのうちの三艘が厳島に向かったことが知られる。なお、この年には囃し船

は各町合わせて十五艘が出たが、そのうち一艘が厳島に向かっただけで、他は広島の中河で管絃の騒ぎをなしたという(『芸』同年七月十二日)。

したがって、広島は御供船は明治二四年ごろから、一時であるうと江戸時代の様を思わせる活況を示すようになったといえる。さきに取り上げた管絃祭のおりの、本川橋・元安橋・京橋の通行の人数制限も、このように御供船を中心とする川の中の劇場空間を見物するため、多くの人々が集まることを前提としていたわけである。ただ、これと江戸時代の御供船を中心とする川の中の喧噪を比べるならば、このころになると前代とは異なり御供船を美しく艀装して飾っても、厳島へ向かうものは極めて少なくなった。そのため、「宮島へお供にも行かないのに、御供船といふのは可笑しい」「ナアニあれはお供ぶねじゃアないお供せんじゃ」という、ダジャレまで作られることになった(『中』明治三四年八月七日)。

なお、山陽鉄道が明治三〇年九月二五日に広島から徳山まで延伸され、そのうえ大野村宮島停車場前棧橋から宮島港棧橋まで、一〇分ごとに汽船が出るようになる(『芸』明治三〇年十月三〇日)、管絃祭の参拝者は飛躍的に増えることになった。このような動きに呼応して、汽船でも厳島神社に参拝する客を満載して運ぶようになった(『芸』明治三一年一月三〇日)。だから、管絃祭のおり広島に立ち寄る人々も、次第に少なくなっていくたわけである。そして、「年毎に管絃祭と広島市とは隔絶せられつつあるは明白なる事実なれば」、広島市民としてこの衰退を食い止めるべき研究が必要であるとの提言がなされることになった(『芸』明治三二年七月二六日)。さらに、明治末年になると、「汽船往復の便あると共に山鉄の交通開けて以来本市に足を停むるものは年一年その数を減じ」、「本市の旅店、料亭、飲食店、その他一般の商家も共に打撃を蒙り」、「茲三四年以来は此の影響殊に著しきを覚え」という有様になったのである(『中』明治四三年七月二五日)。かつて本川から厳島通いの番船が溢れるばかりの旅客を載せていたため<sup>(22)</sup>、広島水上警察署から定員を守るように警告を受けた時代からすると、これはまさに隔世の感がする有様といえる(『芸』明治一七年七月十六日)。

では、御供船が厳島に行かなくなった明治四四年以降の、広島はどのような

に推移しその隆盛を取り戻そうとしたのであろうか。次は、管絃祭との関わりが乏しくなった広島において、いかなる再生策を実施することになったのか検証する。

#### 四 御供船の終焉と広島の賑わいの再生

管絃祭のおりに広島に参拝客が集まらなくなったので、これを克服するため明治四四年ごろから以下のような賑わい策を講じるようになった(『中』明治四四年七月十四日)。まず、元安橋・京橋・住吉橋の付近で、川の中にそれぞれ特色のある川中噴水を上上げる。次に、本川橋・元安橋・京橋の三か所にイルミネーションを、住吉神社には瓦斯灯を掲げることにした。さらに、相生橋・元安橋の中央、住吉橋の上流の三か所で花火を上上げる。しかも、各料亭から囃し船を出すとともに、芸子が舞踊をし提灯行列を行うなどである。この他に、京橋の明神浜には大鳥居の電灯飾りを出し、そのうえ京橋川と本川には御供船と囃し船を浮かべ、各川にも無数の篝火を燃やすことが計画された(『中』明治四四年七月七日)。また、明治四四年から管絃祭の前日の住吉神社の夏祭りでは、祭神の空鞆神社までの渡御を行うこととし、御供船で広島各川をめぐって帰着することにした。このおりには水主町の各組でいろいろ賑わいの工夫がなされ、男たちは十二神祇を演じ、娘たちが住吉踊りの「しやぎり」をすることも計画された(『中』明治四四年七月十一日)。また、下柳町の厳島神社では、七月十四日に初めて玉取祭が行われた(『中』明治四四年七月十二日)。そのうえ、例年の京橋町からの御供船や遊廓などの囃し船も二、三艘出たので、一層の賑わいを添えることになった(『中』明治四四年七月十五日)。こうして管絃祭の賑わいを広島に再び呼び込もうと種々の計画がなされ、非常な賑わいが生まれることになったわけである。

そして、この広島の賑わいの中心として位置付けられたのは、水主町の住吉神社で営まれた夏祭りということになる。この祭りは大正三(一九一四)年には「広島管絃祭」と呼ばれ(『中』大正三年七月四日)、さらに翌年から「水の都」の祭典と理解されるようになった(『中』大正四年七月二八日)。

そして、『中国新聞』大正六年七月二三日号には、その完成形が「水の都の夏祭広島管絃祭」として、次のように報道されている。

【史料5】

祭典は八月一日午後四時、神前渡御奉告祭の後、陸上行列、水主町浅野邸前雁木より乗船、午後七時より多数の囃船を随へて、管絃船は元安川を上り御旅所空鞆神社へ上陸、翌二日午後五時御旅所より本川筋を下り、西本川胡子神社に小憩の後、住吉神社へ還御、これにて神事を終り、両日共餘興の煙火に囃船御伴船或は見物船も河を埋めて、折柄満潮の両川は灯の海となり、絃歌流れて水の広島を威力を示す、住吉神社には十二神祇に玉取あり、御旅所の河中にも玉取あり、境内には二輪加の催しあり、其他歓迎船奇抜の広告船仕掛煙火の奉納等多数申込ある由、

住吉神社の例祭の渡御船のことを明治四四年には「御供船」と呼び、大正三年ごろになると同じ船のことをなぜか「管絃船」と呼ぶことさえあつた(『中』大正三年七月四日)<sup>(23)</sup>。このように住吉神社の夏祭りの渡御船が、新たな名前で呼ばれるようになったのは、この祭りが厳島神社の管絃祭から自立した、独自の性格を持つようになったためと考えられる。なお、さきに取り上げた「水の都の夏祭広島管絃祭」という呼称も、これとほぼ同じ意味合いを持つものと思われる。つまり、厳島神社の管絃祭が執り行われるまえに、様々な工夫を凝らし多くの見物人を集め、広島に大きな賑わいを生み出す新しい祭りを作ろうとしたのである。

だが、京橋川の玉取祭や同明神浜沖の大鳥居の電飾灯、あるいは住吉神社の祭神の水上演御などの企てから知られるように、これらの広島再生策は管絃祭の賑わいを意識した、あるいはそれに近いものといわざるをえないであらう。

最後に、広島が大正時代に入ると「水の都」、「水郷」と呼ばれた理由について付言することにしよう。

むすびにかえて

大正時代になると『中国新聞』紙上では、住吉神社の夏の祭について、「水の都」「水郷」という修飾語を用いるようになる。記者がこのような修飾語を用いるようになったのは、住吉神社の夏の祭が広島を代表する祭りとなつたからである。しかし、広島を代表する祭りになつたからといって、なぜ「水の都」「水郷」という修飾語を付すことになつたのか、依然として疑問が残るといえよう。ただ、広島が「水の都」であることに触れた、次のような記事があることに気付く(『中』大正四年七月二八日)。

【史料6】

広島は古来小浪華と称せられ、水の都と謳はれて居る、然れば広島の色は、夏こそ一入美はしく、殊に毎年催さる厳島管絃祭当日に於ける広島は、その以前は素破らしい賑かさであつたが、今は廃たれて今昔の感に堪へざるものがある

つまり、広島は昔から「小浪華」といわれ、「水の都」と考えられていたというのである。さきに掲げた「六月十六夜広島本川口の囃」に、御供船を中心とする川の中の喧嘩空間について、「そのよそほひ浪華の夏祭もおよぶべからず」とあつたことが想起できる。ゆえに、広島が大坂に比せられる「水の都」であるという理解は、すでに江戸時代末期に生まれてきたことが分かる。ただ、大正時代になって広島にあえて、「水の都」などの修飾語を用いるようになったのは、やはり住吉神社の夏祭りが管絃祭を模したものであつたにしろ、厳島神社の祭りとは関係のない、独立した祭りであることを主張しようとしたためと考えられる。

しかし、このように「水の都」などの修飾語を用いることにしても、広島は厳島神社の管絃祭が創り出す賑わいと無縁ではなかつたというのが現実であらう。広島には本川・元安川・京橋川など何本もの川が流れ込み、昔から強い親水性が見られたにしても、新しく川の文化を創り上げる経緯が乏しかった。そのため、川の上に御供船を中心とした、囃し船などによる激しい劇場空間を創り上げ、多くの見物人が両岸の堤防や「橋」を観客席として、そ

れを楽しむ華やかな経験を持ったにしろ、広島には厳島神社の祭りとの関わりを完全に断つことができない、文化的なひ弱さがあったといわざるをえない。

註

- (1) 厳島神社の神事の一つに「十七夜船管絃」がある。ただし、この神事は近代になると「管絃祭」と呼ばれるようになる。この呼称が今日まで通称として用いられている。なお、宮島では今もなお、「管絃祭」のことを「十七夜」とも呼ぶようである(船附陽子氏の御教示による)。
- (2) 拙稿「戦国大名毛利氏と厳島神社」(『毛利元就と地域社会』、中国新聞社、二〇〇七年)を参照。
- (3) 西村晃「厳島神社管絃祭御供船めぐって―広島城下町祭礼断章―」(『広島県立文書館紀要』第九号、二〇〇七年)を参照。
- (4) 本稿では、広島城下及び狭義の広島市域のことを、以下「広島」という言葉で総称することにする。
- (5) 筆者の幼いころの記憶ではあるが、誰もが「祭り」になると浮かれたような気分になり、神社に参詣することはいうまでもないが、その周辺の夜店などで遊んで帰るのが習わしであった。管絃祭の前後に多くの人々が広島川の周辺に集うのも、その背景にこのような祭りに対するエートスがあったものと推測できる。
- (6) 註(3)の西村論文を参照。ただ、西村氏にしても通説に従い、「御供船は明治維新後にとだえてしまい」と言い切るのには賛成できない。
- (7) 村岡浅夫『広島県民俗資料』第八集 民間信仰(ひろしま・みんぞくの会、一九七六年)、及び野坂元定・野坂元良「写真構成 管絃祭のすべて」(『厳島信仰事典』、戎光祥出版、二〇〇二年)を参照。なお、『中』大正五年七月十一日の記事には、明治四四年以前まで御供船があったと具体的に明記されている。
- (8) 河合正治「厳島神社の祭祀形態とその推移」(『福山大学教養部紀要』第一〇号、一九八五年)を参照。厳島神社の管絃祭の史料上の初見は、天文十(一五四一)年の祭りに言及した文書である。
- (9) 西村晃氏の御教示によると『村上家乗』の毎年の六月十七日条に、「厳島遙拝、清衣、礼服如例」、「簿暮厳島社遙拝、袴着」、「黄昏厳島社遙拝」など、類似の表現が散見しているのが分かる。
- (10) 以下、『芸備日日新聞』は『芸』、『中国新聞』は『中』という略称を用い、そのうえで発行年月日を記すことにする。なお、文意を明らかにするため、私的に記事に適當

なところに句読点を入れた。また、これらの記事に用いられている漢字は、原則として通用の文字に改めることにした。

註(3)の西村論文を参照。

- (11) 熊見曲水「厳島御祭礼」(『尚古』第二年第六号、一九〇七年)を参照。
- (12) 広島だけでなく福山においても、管絃祭の夜に町民が「今夜の潮は安芸の厳島より来るものにて、此の潮を酌取り、翌朝之にて面を洗へば、疱瘡を治すること妙なり、との言伝へに依り、潮を酌むもの多かりき」といった(『中』明治二十九年七月三〇日)。
- (13) 脇田晴子『中世京都と祇園祭』(中央公論新社、一九九九年)及び拙著『厳島神社の神仏習合観の変容』(科学研究費報告書、二〇一三年)を併せて参照。
- (14) 小鷹狩元凱『自慢白島年中行事』(一九二八年)を参照。
- (15) 管絃祭に関する「村上家乗」の記事は、主として註(3)の西村論文による。
- (16) 明治時代の中ごろになると、堺町から出た御供船が本川橋と新橋のあいだで飾り付けがなされ、往来の人が両橋の欄干にもたれかかってこれを見るため、危険の恐れありと警告されたこともある(『芸』明治二十七年七月二〇日)。
- (17) 「村上家乗」嘉永五(一八五二)年(六月)「一六日」を参照。
- (18) 『新修広島市史』第三巻 社会経済編(広島市、一九五九年)を参照。
- (19) 拙稿「厳島神社の神仏分離について―神社の宝物や歴史を守り伝えること―」(『宮島学』、溪水社、二〇一四年)を参照。
- (20) 明治四年以降しばらくのあいだの管絃祭の有無は、手元に史料がないので、あくまでも推測ということにならざるをえない。
- (21) ここで「番船」と呼ばれている船は、管絃祭のおり広島の本川あたりから、参拝者を厳島神社に運ぶため仕立てられた客船のことをいう。
- (22) 住吉神社の祭神が乗った御船について、多くは「御供船」という表現が用いられている。やはり、「水の都の夏祭広島管絃祭」といっても、かつての御供船の呪縛めいたものから完全には解放されていないといわざるをえない。
- (23) 【付記】

本稿は、平成二七年度の「城下町広島市の歴史講座十講義」第三回の講演内容を踏まえたものである。